

成願寺

平成三十年 孟蘭盆会説教

一念観心 ―真心を込めるといふこと―

埼玉県東陽寺 前任職・仏教情報センター顧問 鈴木永城
ただいま詳しいご紹介を賜りましたが、私の生家は世田谷区三宿にありまして、成願寺様の檀家でございます。高校二年生で出家得度いたしました際は、先代の方丈様に「檀家から坊さんが出た」と大変喜ばれ、気にかけていただきました。



埼玉県 東陽寺 前任職
茨城県 実伝寺・宝昌寺 住職
仏教情報センター顧問
鈴木永城老師

季報

119

平成 31 年 2 月 18 日
(2019 年)

目次

「一念観心―真心を込めるといふこと」鈴木永城……	1
成願寺中野たから幼稚園 年長児の活動……	8
平成三十年 秋の観音詣りの報告……	9
山内短信……	12

春彼岸中日法要「修証義奉誦会」のお知らせ

三月二十一日(木) 春分の日

十一時～ 受付始まり

正午 講演 日向ひまわり師

一時 法要

春の観音詣りのお知らせ

四月二十九日(昭和の日)の観音詣り。

成願寺に七時集合・出発。まずは武蔵境観音院を参拝。住職の来馬正行老師にご本尊・准提観音様のお話を頂戴します。その後、つつじ祭で賑わう青梅市塩船観音寺を参拝。清酒「澤乃井」で知られる蔵元小澤酒造を見学。昼食は蔵元直営自家製豆腐会席「ままごと屋」。さらにあきる野市、如意輪観音様が祀られる尾崎観音寶蔵寺を参拝。檀家以外の方も、どなたでもご参加いただけます。会費 一万五千元(予定)

発行 多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作 地人館

今日は久しぶりに寺参り、墓参りをさせていただけましたが、つい先日、七月七日が母の祥月命日忌でございました。常日頃は、末っ子ではありませんが、自分の部屋の仏壇に先祖・両親・妻の位牌を安置いたしました、手を合わせております。手を合わせる思いはいつも同じなのですが、やはり祥月命日というのはいつになく亡き人のことが偲ばれる、特別な思いがいたします。

私は十一歳、小学校六年の時に母を亡くしましたので、すでに六十四年の歳月が経っております。幼少の頃に母に手を引かれて成願寺様にお詣りに来たことや、母が亡くなったあとは、父と墓参りに来たことなど昨日のこのように思い出されますが、それと同時に、歳月の流れの早いことにも驚かされます。これは歳を重ねれば重ねるほど、感じることもおしれません。幼少の頃などは「もういくつ寝るとお正月」などと、歳をとるのが楽しみでした。それが今となれば、「時間よ止まれ」といった心境です。

本日は、平成十三年の年末にお話に参加いたしました以来、実に十八年ぶりにみなさまにお目にかかっております。そんな私も七十五歳になりまして、最近「若い」ということがつくづく実感されます。

私は川柳を趣味としておりますが、身に付いてまわることなら、「若い」をテーマに句集を計画しております。そうして集めてみましたら、何と八十ほどの作品が出来上がっていました。

ちよつとご紹介しますと、

足早な 杖^{すが}追い^{つづら}継る 葛折^ら

これは、歳を取りますと杖が頼りになります。それがいつの間にか、杖が先を行くような気になる。足腰が衰えると、側にあるはずの杖に追い継るように歩く。そんな情景を詠んだものでございます。葛折りと申しますのは、日光のいろは坂を思い出していただくと思えますが、葛のツルのように曲がりくねっている、登りづらい坂道です。

大本山永平寺を開かれた道元禅師様のお言葉に「時光いたずらに過ぎすことなかれ」という一節がございます。私が先ほど申しました「杖」は、道元禅師様のおっしゃる「時光」、つまり時の流れを表現しております。「足早な杖」は時の流れの速さです。その「時」の流れは「光」のようだ。だから大切な時間を虚しく過ぎ去ってはいけません。一日、一日を尊く確かに過ごすべきだと説いておられます。

今日も春日部のお寺から乗り換え、乗り換えで中野坂上まで参りましたが、このところ腰の調子が悪くなりましたし、左足は歩いていきますとしびれるんです。私も老いてしまったな……、という心境にも通じる一句でございます。

もう一句ご紹介しますと、

老眼や 探す眼鏡は 鼻の上

この句意は、歳を重ねますと物忘れがひどくなりますのでしよう。最近では眼鏡が進化しまして遠近両用。テレビなんかを観ておりますと、いつの間にか眼鏡をかけたまま寝てしまう時がございます。「私の眼鏡はどこにいったんだ」なんて申しますと、家族が言いにくそうに「方丈様、お掛けになっていきます……」。何とも恥ずかしい思いをいたします。

つい先だつても、ウイルス性の風邪が流行りましたので、移らないように、移さないようにマスクをしておりました。部屋に戻りますと、メロンを切ってくれていました。冷たいうちに、さあ食べようとメロンをフォークに刺して、そこでようやくマスクを取らなきゃと気づきました。そこまで来ないとマスクを外さない鈍さ。これがマスクメロンだっただ

けに、思わず苦笑いしたものでした。

この物を忘れるということは、血液の循環の悪さも一因だと聞きますが、「凝る」ということ。ご婦人のみなさまだとよくおわかりですが、お魚なんかを煮付けますと、その煮汁が冷えて固まって動かなくなります。つまり煮凝りができますでしょう。さらに申しますと、「痼」という字がございまして、これは「病だれ」に「固まる」ですね。凝って硬くなること、それが「痼」ですね。

みなさま、歌手の細川たかしさんはご存知ですね。ではデビュー曲はご存知ですか。これはね、細川たかしさんのデビュー曲が「心のこり」だとかかに書いてあったのだそうです。それをご覧になった方が、「心の、こり」、「なるほど、心も凝るのか」とつぶやいたというのです。このエピソードを新聞で読みました時に、「はっ」としましたね。なぜかと申しますと、実は仏教では「心も凝る」というのです。「心を凝らしてはいけません」、「心に痼を作つてはいけません」というのが仏の教えなのです。

では、仏教でいう「痼」とは何なのか。それが煩惱です。百八の煩惱……。一年間の心の塵、煩惱を払いましょうと除夜の鐘をお撞きになるでしょう。

その百八の煩惱の中でも代表的なのが三毒と言われる貪瞋痴で、これが心の中に留まって、なかなか動かない。「貪り」、「怒り」、「愚かさ」という思いです。特に「貪り」の心はいけません。何かを得たいともがいてるのに、得ることができずに苦しんで、悩み、患う。不平不満の気持ち湧き出て、安らぎというものから、自ら離れてしまふ。

仏教は、心に痼を作つてはいけませんという教えですから、それならば痼になる前に、心に留めず洗い流し、手放せられれば話は簡単です。

しかし、言うは易く行ふは難しで、これがかなりの難問です。臨済宗の『禪林世語集』という本に、こんな一首があります。

気もつかず

目には見えねど 一つのまにか

埃たまはるは 袂なりけり

煩惱というのは、残念ながらそういうものなのですね。「塵も積もれば山となる」で、いつの間にか溜まっている。気をつけているつもりでも、気がつかない煩惱というものもあるのです。また、理屈を振りまわしている限りは、煩惱から解放されません。

こうしてお寺参りをして、仏様、ご先祖様の前で無心な気持ちで手を合わせておりますと、いつとはなしに清々しい気持ちにさせられます。医学的にいえば、血流が良くなれば、動脈硬化症を防げるということにも通じそうです。

「おせがき」の三つの大きな意義

さてこの煩惱を具象化したものが「餓鬼」といえます。この「鬼」という字、恐ろしいと思われがちですが、もともとは亡くなった人、亡くなった祖先の魂という意味でした。「鬼籍」などといいます。

「餓」の方は、「食」に「我」と書きますが、この「我」は私という意味ではなく、刃こぼれしてぎざぎざになつてしまった鈍のようなものを想像していただければ良いと思います。つまり「餓鬼」の姿というのは、やせ細つて肋骨が浮き出て、まるで刃こぼれしたようだという事なのです。

それがだんだん「供養を待っている魂」と、意味合いが変わってきました。供養がされないで、いつまでも餓えて苦しんでいる。それが一般的に「餓鬼」のイメージとなつてゐるわけです。

ではその「餓鬼」に「施す」で、「施餓鬼」とか「施

食」と申しますが、これから法要の中で方丈様がお唱えになられると思いますが、「咒食しじき」という偈文がございます。

その「咒食」を「餓鬼」に与える、施しをするのです。ただ、餓えている「餓鬼」に食べ物をやるというのではなく、仏様の教えの偈文と共に施しているわけです。「法味ほうみ」という語がありますが、仏の法、教えの味を含ませた供物を施すということ。それによつて救いがある。成仏に導くというもののなのです。これが一つ目の意義でございます。

もう一つ、やはり法要中にお唱えをする回向文があります、

此の修行をする諸々の善根を以て、

父母の劬勞くろく（骨を折つて働く）の徳に報答す

これをわかりやすい言葉で申しますと、今こうして供養している功德は、私自身が受けるものだけでなく、骨身を惜しまず養育してくれたお父さん、お母さんにこの功德は差し上げます。こうした意味になります。

ですが、実は単に、自分の両親に対してだけではない。「七世の父母」といって、七代遡さかのぼった先祖のこ

ともお経に出て参ります。つまり、自分を育ててくれた「あらゆる親心」に対して報いたいということなのです。これが二つ目の意義です。

少し話が逸れますが、みなさんは、南米ウルグアイの元大統領ホセ・ムヒカ氏をご存知でしょうか。その質素な暮らしぶりから「世界で最も貧しい大統領」と言われた方で、三年ほど前に日本にもお見えになりました。この方がすごいなと思いますのは、一国の最高権力者に上り詰めた人です。普通そうした方は、立派な服を着て、立派な車に乗って、ある意味では市民より良い暮らしぶりの場合が多いわけです。どこかの国では、自分は贅沢な暮らしをして、国民の多くは、一体どうなってるの、というところもありますでしょう。

ムヒカ氏は、「貧乏な人というのは少ししか物を持つていないのではなく、無限な欲があり、いくらあっても満足しない人のことだ」と言っています。実際、大統領としての報酬も、わずかな生活費の他はほとんど寄付をされ、議会に行くのも、修理に修理を重ねた年季の入った車を、自分で運転して通っていたそうです。

先ほど「貪り」という煩惱の話をしました。自

らの心の「餓鬼」を取り除くということが、三つめの意義に挙げられます。ムヒカ氏が仏教をご存知とは思いませんが、仏教の精神をそのまま実践されていたような方だと感じ入っております。

もう一つのエピソードは、ムヒカ氏は接待などには全く応じなかったことです。これは、「一握りの金持ちと付き合っていたら、国で何が起きているかわからなくなる。国民の生活レベルが向上すれば私の生活レベルも上がるであろう」。

どうですか。自分さえ良ければ良いのではない。みんなと一緒に、という大統領でありました。

お経の中に、「平等共有」と説かれています。また「我等と衆生と皆共に」とも示され、これらはつまるところ、欲にからんで差別する心の餓鬼を鎮めることに他なりません。

目には見えない功德

ある日、お寺を訪ねて来られた檀家さんから、こうした相談を受けました。「方丈さん、参っちゃったよ。孫からね、仏壇の供え物が減らないってことは、ご先祖様は食べてないよね。食べないんだから、上げてもしようがないんじゃない?、と……」。こんな

話を聞いて思い出したのが、どなたかが詠まれた次の川柳です。

熟れるまで お預けします 仏様

これは、メロンか何か到来して、賞味期限を見たはまだ食べ頃ではない。そこで取りあえず仏壇にお供えする。それも預けるっていうのですから、頃合いを見て、下げて食べようという腹づもりのようです。これでは供養になりません。せめて、食べ頃になってから包丁を入れて、仏様の分をお供えし直していただきたいものです。

近頃の人たちは、「おいしいものを食べよう」とはしますが、「おいしくものを食べよう」と工夫する気持ちが薄いように感じられます。似たような言葉ですが、まったく違います。つまり、心を込めるとか、心の豊かさというものが欠如しているのです。

先ほど、道元禅師様のお言葉をご紹介させていただきましたが、もう一方の大本山、鶴見の總持寺を開かれた瑩山禅師様のお話をご紹介します。瑩山禅師様の時代の天皇である後醍醐天皇は、禅師の徳の高さを聞いて、仏教に対する質問を発しておられます。そのご質問に対して、奉答されたものが「十種

疑滞」で、八番目の勅問にこう記されており。

「教えの内には、ことごとく功德を以って行となす。人みな父母のために、靈供（お膳）を供え、茶湯を献ずれども、消えず、費えず。朕また疑滞（疑問あり）。

これは、先ほどのお孫さんの素朴な疑問とあい通じます。これに対する瑩山禅師様のお答えです。

「壁を隔てて梅香自己に親し。匂い満堂に通ずと雖も、花の芯少しも損なわず。香を聞くと雖も、鼻腔もまた跡なし。（略）雨露の草木を養うが如し（略）」。

私なりの解説をさせていただきますと、壁を隔てて、梅の香りが私まで漂ってきている。この部屋いっぱいには充滿している。けれども梅の花は変わることはないのです。その香りを嗅いだ私たちの鼻も変わってしまいますか。そんなことはありません。供養というのは姿形だけのことで無いです。雨露が草木を養うと言いますのも、ずっと雨露の形そのままであるわけではなく、大きな循環の中で草木を養っています。

瑩山禅師様はさらに、手紙に例えておられます。それは、手紙の内容を読んだあと、変化がありませんか、ということなのです。文字が消えますか、紙が減り

ますか。それに加えて、遠く隔たつていても、相手の思いや暮らしぶりがうかがえます。見えないはずのものが、ありありと見えてきます。功德というものも、そういうあらわれ方をするものなのです。

そして最後に「一念観心のところは是なり」と結んでいます。一念を込めて、真心を込めてひたすら思いをいたせば、目にみえなくても功德が芽生えてくる。というより、それを実感することが出来るというおさとしだと思えます。これから法要が始まります。施餓鬼とは何か、供養・功德とは何か、その一端をお話いたしました。そうした思いで一緒に勤めいただければと思うわけでございます。

ご清聴ありがとうございます。

合掌



鈴木永城著

『続・仏教なんでも相談室』

大法輪閣刊行

本体 1,600 円 + 税

成願寺中野たから幼稚園 年長児の活動

成願寺副住職・幼稚園主事 小林要介



合掌をして大きな声でお唱えします。

年長組の卒園遠足は横浜市鶴見の大本山總持寺（成願寺の大本家）へ記念参拝です。
昼食は本山内の部屋で、各家庭で用意したお弁当を持ち寄って食べています。
本山（禅寺）ではご飯をいただく時の心構えをお唱えする作法が
あり、年長児も三学期になってから練習をかねてその偈文をお唱えしています。給食お当番さんは戒尺（拍子木）も上手に打ちます。皆さんすぐに暗記して息もぴったりです。

お唱えする偈文は「五観の偈」と申します。食事は心静かに手を合わせ、感謝の気持ちをもっていただくのです。年長児に向けて意識しましたので紹介します。

合掌

一には、功の多少を計り、彼の来処を量る。

（これからいただくごはんは、たくさんのごはんのひとたちによりつくられています。さらにしぜんのおめぐみのおかげで、おいしくたべることができます。ありがとうございます、よくかんしやしていただきます）

二には、己が徳行の全欠を付つて、供に応ず。

（ともだちとなかよくあそんでいるか。うそをついていないか。らんぼうなことをつかつていないか。じぶんのおこないをはんせいし、いただきます）

三には、心を防ぎ過を離るることは、貪等を宗とす。

（もつとたべたいとよくばったり、きらいなものはたべたくないなどかながえません。ぎょうぎよくいただきます）

四には、正に良薬を事とするは、形枯を療ぜんが為なり。

（けんこうでしようぶなからだ、げんきいっぱいのえがおですこせるように、よくかんでいただきます）

五には、成道の為の故に、今此の食を受く。

（これからもげんきで、みんなとなかよくあそべるように、そしていまをだいじにすこすため、このごはんをいただきます）

平成三十年秋の観音詣りの報告

昨年秋の観音詣りは、十一月十二日(月)から二泊で庄内・奥州の古刹を巡拝いたしました。

成願寺に朝六時半集合。ご祈禱の後、大型バスに乗り込むと、一路山形へ向けて出発。途中数度の休憩と昼食を挟んで、二時ごろ鶴岡市の出羽三山神社に到着。バスを降りると案内役の山伏の方が出迎えてくださり、「お注連」を一人ひとりに授けてくださいました。それを首にかけることで、霊山に立ち入ることが許されるのです。

羽黒修験道の道場・出羽三山は、千四百余年前の推古元(五九三)年に崇峻天皇の第一皇子・蜂子皇子が羽黒山を開かれたのがその始まり。羽黒山・月山・湯殿山の神々が合祀される合祭殿は国の重要文化財



合祭殿の前で記念撮影。

に指定され、茅葺木造建築物としては日本最大の大きさを誇ります。山伏の方の案内で、現在も宮内庁が管理をしているという蜂子皇子の墓所や、十日間ほど滞在したという松尾芭蕉像などを拝観。記念撮影の後、参集殿より三神合

祭殿にご案内いただきました。内部は総朱塗りで「三神合祭殿」の大きな扁額が目を引きます。太鼓と法螺貝の音を合図に、神様のお側近く拝殿に進み出ると、神職の方の導きで平伏。祝詞のあとにお祓いをしていただきました。大黒天に手を合わせてから廊下に戻り、御神酒を拝戴しました。身も心も清められた一行を乗せて、バスは善寶寺へ。

十八年ぶりの拜登となった善寶寺は、千二百余年前の二体の龍神伝説にはじまる巨刹。特に北前船北海道漁業に携わる漁師や豪商の厚い信奉を集めて隆盛を極めました。現在も三百六十五日、毎日六座のご祈禱が厳修される祈禱と信仰の道場として、全国にその名を知られています。伽藍は壮大で、国の登録有形文化財を含む大小三十余りの堂宇が立ち並びます。その中に百六十年前に建てられた五百羅漢



一行一倒される様に羅漢並居。

堂があります。接客長の阿部竜平師のご案内で、時間外にもかかわらず、特別に中を拝観させていただきました。

釈迦三尊をはじめ、四天王、風雷神神、百六十年前当時の寄付者・発願者など合わせて五百三十一体

のご尊像が一堂に会す様子は圧巻。色彩豊かで、さぞ完成当時はきれいだったろうと思っただら、三年前より地元・東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターの協力を得て、羅漢像すべてを修復中とのこと。順次一体ずつX線で状態を分析し、必要ならば解体。清掃、破損箇所を修復するそう、ご尊像すべてがきれいになるには、二十年以上の歳月が必要とのご説明をいただきました。

羅漢様のお顔は表情豊かです。これは、昔は写真がなかったため、亡き人を偲ぶ際、似たお顔の羅漢様を探して手を合わせたという事です。一行も懐かしいお顔を探してお詣りしました。今夜はこのまま、善賢寺の宿坊へ。

建物内には八体の蛇紋石が祀られていて、その石をなでると龍神様のご加護をいただけるとのこと。



貴重な坐禅体験。



朝のお勤めに参列。



クラゲの生態について飼育員から説明を聞く一行。

スタンプラリーにもなっていて、一箇所一つスタンプを押すと、「所・願・成・就／如・意・吉・祥」のお札が完成。良い記念となりました。

その後、修行僧のみなさんが日々修行をされている僧堂へ導かれると、「作法を考えず、ただリラックアして、息を大きく吸って吐くということを中心に掛けて坐る体験をしてください」とのご案内。わずかな時間でしたが、一同感激の坐禅体験でした。

明朝は五時振鈴（起床）。身支度を整え本堂に向かいます。ほどなく朝のお勤めが始まると、龍神様の独特なお経が上げられます。途中、一行の名前も読み上げてくださり、交通安全、災害消除、所願成就などを祈念していただきました。八大龍王が祀られる龍王殿を参拝した後、導師をお勤めくださった侍局長兼典座の百瀬良鷲師と修行僧のみなさんと記念撮影。お札を頂戴して朝ごはんをいただき、心のこもったお世話をくださった善賢寺を後にしました。

二日目の最初は、クラゲの展示数世界一を誇る「加茂水族館」。庄内の川や池に住むウグイやアブラハヤなどの淡水魚、庄内浜の沿岸に住むカジカやシマウキゴリなどの海水魚の展示から始まり、クラゲ展示室「クラネタリウム」へ。幻想的なクラゲの姿を見



土門拳の力強い写真を鑑賞。



向海寺では最初に粟島水月観音堂を参拝。



如意輪観音様にお詣りする一行。

学。続いて酒田市出身の写真家、土門拳の記念館へ。土門拳は戦後日本を代表する写真家の一人で、代表作「古寺巡礼」をはじめ、「室生寺」、「ヒロシマ」など多くの作品を遺しています。その作品群は本人の意思で酒田市へ寄贈され、昭和五十八年に鳥海山を望む飯森山公園に「土門拳記念館」が開館しました。一行は特に仏像の写真を興味深く見学しました。

バスは江戸時代より続く料亭「相馬楼」へ。文化財にもなっている建物をまずは見学。竹久夢二美術館も併設されていて、叙情豊かな作品をしばし堪能。大広間にて食事をいただき、待つてました！酒田舞妓一花さん、小結希さんの華やかで雅びな演舞を鑑賞。一とき江戸のお座敷情緒を楽しみました。

ほど近くの海向寺は、千二百余年前、真言宗開祖空海が開創。湯殿山信仰を受け継ぐお寺として、ま

た歴代住職である忠海上人、圓明海上人の即身仏のお寺として人々の祈りを支えてきました。

ご寺族にご案内いただき、お厨子に安置された二人のお上人様に参拝させていただきました。「末世までの人々の苦しみを救い、願い事を叶えるためには木食行者となり、姿を残す」と決意され、湯殿山に籠られると、五穀断ち、十穀を断ち、さらに深さ三メートルの土中に入って断食、読経を行い、その声が途切れて三年三ヶ月後に掘り起こし、即身仏になられたとのこと。そこまでされてまで、人々を救いたいという深い慈悲を目の当たりにした参拝でした。

二日目は、名湯鳴子温泉「鳴子ホテル」で旅の疲れを癒しました。

最終日は両本山と並び、奥州二州の元本山として栄えた正法寺へ。南北朝時代、總持寺二祖峨山韶碩禪師の高弟無底良韶禪師によつて開かれた古刹。国指定重要文化財の伽藍が並ぶ様は格式の高さを感じさせます。丁寧な案内のあと、ご本尊の如意輪観音様にお詣りをさせていただきました。

紅葉が見頃な中尊寺で案内をいただきながら本堂、金色堂を拝観。わんこ蕎麦の昼食をいただいた後、成願寺への帰路につきました。

了

山内短信

◎NPO法人「安達原玄祈り写仏の会」成願寺教室生徒募集
仏様の描かれた下絵に色を重ねて仕上げます。初心の方も個人別にやさしく指導いたします。

日時… 毎月第三土曜日 十二時半～十七時
講師… 安達原千雪（安達原玄先生直門）
会費… 一回 三千五百円（教材費別途）

◎泉貴之氏・災害時用物資寄進の報告

当山の古くからの檀信徒である泉氏より、このたび、災害時に役立つ物資、簡易トイレや防災マスク、寝袋型ブランケットなどをたくさんご寄進いただきました。泉氏が代表取締役社長を勤める「株式会社^そ蘇」では、



防災グッズの販売を手がけておられます。ご報告まで。

◎成願寺付属中野たから幼稚園父母会卓球部

昨年続き、ブロック優勝の報告

去る十一月十一日（日）中野体育館で開催された、中野区卓球連盟主催「第三六回中野区PTAチーム総合卓球大会」において、昨年引き続きブロック優勝をいたしました。中野区内の私立幼稚園、区立小学校、中学校のPTAチームが参加する中で、たから幼稚園Aチームのブロックには、中学校のPTAチームも二チームいましたが、全勝することができました。たから幼稚園Bチームでは、新入部員が初試合に挑みましたが、緊張する中、大健闘！試合後、「楽しかった」との談。今後も力を合わせて練習に励んでいこうと思います。



◎寄宿生募集のお知らせ

当山近辺の施設に寄宿し、学校等に通う勤勉な若者を受け付けます。

朝の行事（作務・朝飯）に参加（七時以降自由）。
僧俗・性別・国籍不問。

詳細は寺務所にお問い合わせ下さい。